



図1 「瑞祥図」(絹本着色、35.0×56.5cm)



図2a-c 「瑞祥図」(細部)：石榴を摘み、運び、捧げる



図3a-b 「中興瑞応図」(絹本着色、34.5×1463.3cm、©龍美術館 上海)の勾欄と「瑞祥図」の類似の勾欄

階段と装飾された勾欄

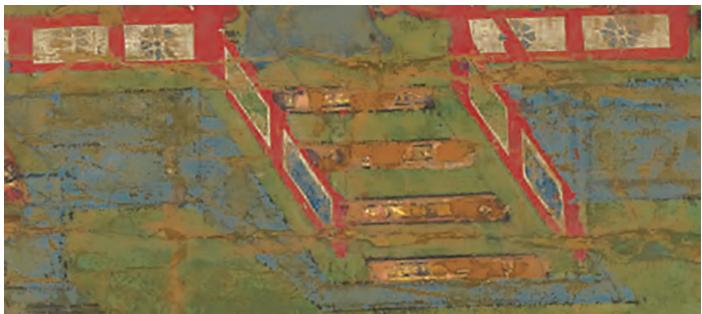


図3c 「摩尼父母図」(細部) 写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図3d 「摩尼誕生図」（細部）
©九州国立博物館



図3e 「聖者伝図(3)」（細部）
©東京・個人蔵

屋根の構造



図4a 「瑞祥図」（細部）



図4b 「摩尼父母図」（細部）
写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図4c 「摩尼誕生図」（細部）
©九州国立博物館



図4d 「聖者伝図(3)」（細部）
©東京・個人蔵

棟下の瓦



図5a 「瑞祥図」（細部）



図5b 「摩尼父母図」（細部）写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図5c 「摩尼誕生図」（細部）©九州国立博物館



図5d 「聖者伝図(3)」（細部）©東京・個人蔵



図5e 「聖者伝図(3)」（細部）
©東京・個人蔵

王妃と侍女



図6a 「瑞祥図」（詳細）



図6b 「摩尼父母図」（細部）
写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図6c 「摩尼誕生図」（細部）
©九州国立博物館



図7a 「摩尼父母図」（細部）写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図7b 「摩尼誕生図」（細部）（明るさとコントラストを調整）©九州国立博物館

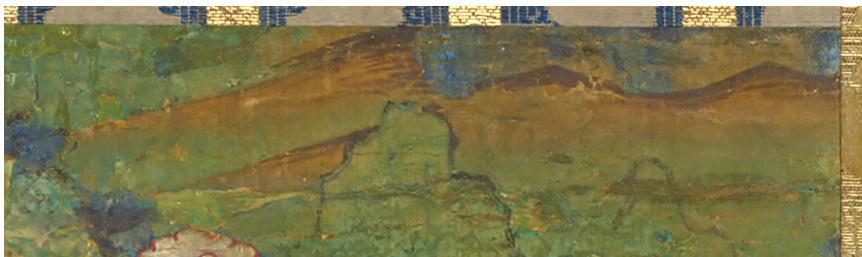


図8a 「摩尼父母図」（細部）©サンフランシスコ・アジア美術館



図8b 「摩尼父母図」（細部）写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館



図8c-d 「聖者伝図(3)」（細部）©東京・個人蔵





図8e 「聖者伝図(3)」(細部)
©東京・個人蔵



図8f 「聖者伝図(3)」(細部)
©東京・個人蔵



図10a-c 「摩尼両親図」(細部)
写真提供©サンフランシスコ・
アジア美術館(明るさとコント
ラスト調整)





図9a-b 「瑞祥図²¹⁾」と「摩尼父母図」(写真提供©サンフランシスコ・アジア美術館)²²⁾を接合した絵画

はじめに

『帝京大学シルクロード叢書』の第5巻となる本書では、『シルクロードの宗教1』と題して、中央アジア地域で信仰されていた宗教であるゾロアスター教、仏教、キリスト教、マニ教に関する概説や論文を収録した。本書には、これまでに発表されている論文のみならず、あらたに書き下ろされた論考も含まれている。

帝京大学シルクロード学術調査団は2016年よりキルギス共和国国立科学アカデミーと共同でキルギス共和国の北部に位置するアク・ベシム遺跡で発掘調査を実施している。このアク・ベシム遺跡はかつてスイヤブと呼ばれた都市遺跡で、5～10世紀にかけて、この地域の農耕の拠点として、そしてシルクロードの国際的な交易都市として繁栄した。この遺跡では、日干しレンガ造りの住居や土器、鎌などの金属製品といった、ここに住んでいた人々の日常生活そのものの痕跡のみならず、シルクロードを通して広がったさまざまな宗教の痕跡もまた見つかっている。

1939年から行われている発掘調査では、宗教に関連するものとしては、ゾロアスター教徒の埋葬に用いられたオッスアリ（藏骨器）、3つの仏教寺院（AKB-0区、AKB-1区、AKB-18区）、2つの東方キリスト教会（AKB-4区、AKB-8区）、キリスト教徒の墓地（AKB-3区）、そして「城」（AKB-5区）が確認されている。なお、1953～54年に AKB-1区～AKB-5区で調査を行なったクズラソフ氏は、その後、AKB-3区についてはマニ教徒の墓地、AKB-5区の「城」についてはマニ教徒の「沈黙の塔」であるというあらたな見解を示している。また、それに基づいて、アク・ベシム遺跡の第1シャフリスタンを取り囲むように、明確に設定された聖なる空間が存在したとしている。つまり、東側はキリスト教徒、南側は仏教徒、西側はマニ教徒、北側はゾロアスター教徒の聖なる空間であったという見解を述べているが、現時点では、この見解を明確に裏付ける証拠もなく、信憑性に乏しいものだと言わざるを得ない。とはいえ、これまで見つかっている宗教や信仰に関する痕跡は、かつてスイヤブに住

んでいた人々の間でシルクロードを通じて広がったさまざまな宗教が信仰されていたことを示す明らかな証拠である。

帝京大学シルクロード学術調査団は、2022年から第1シャフリスタンの東南隅に位置する東方キリスト教会（AKB-8区）、そして2024年からは第2シャフリスタンに位置する、第0佛教寺院とも称されている佛教寺院（AKB-0区）で本格的な発掘調査を実施している。これらの2つの遺構は、かつてそれぞれセミヨーノフ（AKB-8区）とベルンシュタム（AKB-0区）によって発掘調査が行なわれたものであるが、その年代観や構造を明らかにするために、あらためて調査を実施している。東方キリスト教会は、本書にも収録されている論文「総大司教ティモテオス1世とテュルク人の首都大司教」に直接的に関連するものであり、これまで10~11世紀の創建とされた東方キリスト教会の創建年代の見直しに迫るものである。また第0佛教寺院は杜環の『経行記』に記された大雲寺であると推定されている佛教寺院であり、実際のところ、2024年、2025年の発掘調査では、中国式の佛教寺院であることを示す証拠が見つかっている。なお、帝京大学が実施している調査区については、ベルンシュタムが行なった発掘調査との混同を避けるために AKB-21区と名付けられている。

さて、本書の構成であるが、巻頭に収録した吉田豊著「ソグド人の信仰・生活・文化とソグド語文献」は、シルクロード交易で活躍し、スイヤブ（アク・ベシム遺跡）を建設したとされるソグド人とその信仰や文化に関する概説であり、それ以降の論文の導入の役割を果たしている（以下、敬称略）。それに統いて、佛教に関するものとしては、岩井俊平著「中央アジアにおける佛教寺院の伽藍配置の変遷」、エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール著、宮本亮一訳「玄奘の旅程に関する覚え書き」を収録した。キリスト教に関するものとして、森安孝夫著「前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教」、マーク・ディケンズ著、山内和也・吉田豊訳「総大司教ティモテオス1世とテュルク人の首都大司教」の2本を収録してある。本書の最後の部分を構成するのがマニ教に関する3本の論考で、吉田豊著「マニ教と江南マニ教絵画概説」、同じく吉田豊著「藤田美術館蔵絹絵マニ像の新発見に寄せて」、そして張鵬、ガーポル・コーチャ著、岡田理恵子訳「新出の中国マニ教絵画「摩尼降誕

を告げる瑞祥図」である。

吉田豊著「マニ教と江南マニ教絵画概説」は、マニ教に関する理解に資する導入として本書の出版にあわせて書き下ろされたもので、2021年に行なわれたシンポジウムでの口頭発表が基となっている。また、「新出の中国マニ教絵画「摩尼降誕を告げる瑞祥図」」に関しては、もともとの論文に用いられている図版がカラー図版であるというだけでなく、同論文では「色」そのものが重要な論点となっていることから、本書では巻頭のカラ一口絵として掲載した。また、そのほかの論考についても、初出論文において図が小さくて見づらいものに関しては、版面が許す限り、拡大して掲載してある。なお、各論文等の初出については、文末の一覧表をご参照願いたい。

「はじめに」を終える前に、本書に論考の掲載をご快諾くださった故森安孝夫氏について記しておく。森安孝夫氏は2024年8月26日にお亡くなりになった。享年76であった。森安孝夫氏は、2020年1月に開催された「2019年度シルクロード研究会」において「トルコ民族とキリスト教」と題してご講演くださり、それを基に、「前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教」という論文を当研究所の『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集にご寄稿くださった。森安孝夫氏の同論文の本書への再録については、生前に当研究所の吉田豊客員教授を通じてご依頼申し上げたところ、ご快諾いただいたという経緯がある。ここに記して、深く感謝申し上げるとともに、故人のご冥福をお祈り申し上げる。

最後になるが、本書の出版にあたっては、論文の掲載、翻訳をご快諾いただいた研究者の皆さま、および関係機関に深く感謝申し上げる。また、本書がシルクロードで信仰されていた宗教を理解する一助となり、そしてシルクロード、中央アジアに関心を持っていただくきっかけになれば、編者としては幸いである。

帝京大学文化財研究所
山内和也

〈所収論文の初出一覧〉

吉田豊「ソグド人の信仰・生活・文化とソグド語文献」『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書』シリーズ第4巻『ゾロアスター教とソグド人』2023年、pp. 125-146。

岩井俊平「中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集（2019年）、pp. 79-97。

エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシェール著、宮本亮一訳「玄奘の旅程に関する覚え書き」『帝京大学文化財研究所研究報告』第22集（2024年）、pp. 243-249。

森安孝夫「前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集（2021年）、pp. 5-39。

マーク・ディケンズ著、山内和也・吉田豊訳「総大司教ティモテオス1世とテュルク人の首都大司教」『帝京大学文化財研究所研究報告』第22集（2024年）、pp. 219-242。

吉田豊「藤田美術館蔵絹絵マニ像の新発見に寄せて」『帝京大学文化財研究所研究報告』第21集（2022年）、pp. 39-48。

Zhang Peng, Gábor Kósa, "A New Chinese Manichaean Painting: Auspicious Signs Heraldng Mānī's Birth," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 77, 2024/3, pp. 433-460.

目 次

はじめに

ソグド人の信仰・文化・生活とソグド語文献

吉田 豊 1

中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷

岩井俊平 23

玄奘の旅程に関する覚え書き

エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシェール著 宮本亮一 訳 53

前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教

森安孝夫 67

総大司教ティモテオス1世とテュルク人の首都大司教

マーク・ディケンズ著 山内和也・吉田 豊 訳 135

マニ教と江南マニ教絵画概説

吉田 豊 177

藤田美術館蔵絹絵マニ像の新発見に寄せて

吉田 豊 207

新出の中国マニ教絵画「摩尼降誕を告げる瑞祥図」

張鵬・ガーボル・コーチャ著 岡田理恵子 訳 225

ソグド人の信仰・文化・生活と ソグド語文献

帝京大学文化財研究所 吉田 豊

0 はじめに

唐代以前シルクロードで活躍した交易の民として有名なソグド人は、イラン系の民族で、アム川とシル川に挟まれた地域を東から西に流れるザラフシャン川流域を故国とする。その中心はサマルカンドであった。（図1）現在のウズベキスタンの南部とタジキスタンの北部にあたる。この地域は8世紀頃から徐々にイスラム化し、10世紀にはイスラム圏の一地方になった。本稿では、ソグド語文献の研究者である筆者から見た、ソグド人のイスラム化以前の宗教や文化について解説することにする。

1 ソグドの「山田太郎」：ナナイヴァンデ

今はあまり見なくなったが、履歴書などの見本で、個人名の部分には男性の場合「山田太郎」と書いてあることがある。これは架空ではあるが代表的な日本人の個人名を示し、英語圏では John Smith がそれに当たるという。ソグド語でそれに当たるのはナナイヴァンデ (nnvβntk) であろう。これはソグド語文献で最も頻繁に見られる男性の名前で、最近発表された漢文とソグド語のバイリンガルの墓誌でも、北齊の天統二（566）年に鄰で死んだソグド人はその名前だった。漢文版では商客と呼ばれ、名前は遊惺惺槃陀とある。遊姓のソグド人はこれがはじめてだが、名前の「惺惺槃陀」はソグド語の nnyβntk を漢字で音写している。ナナイないしはナナは本来メソポタミアの女神であったが、

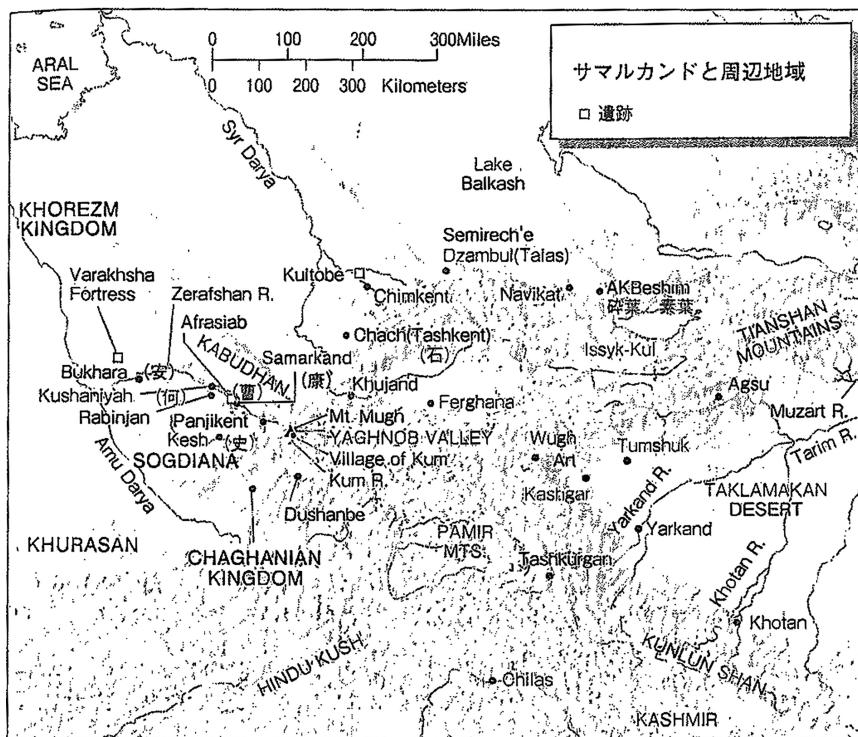


図 1 ソグドの地図 (吉田豊『ソグド語文法講義』臨川書店、2022より引用。V.Hansen, *The Silk Road*, Oxford 2017に基づく)

ソグドやバクトリアなどの東イランで広く信仰された。ゾロアスター教の女神アナーヒターと習合したとされる。ヴァンデ (β ntk) は「男の奴隸」を意味するソグド語で、ヴァギヴァンデ (β yy β ntk) 「(ミスラ) 神の僕」、マーフヴァンデ (m' x β ntk) 「月神の僕」など「~神の僕」を原義とするソグド語の人名は多い。瓜州で玄奘の案内役を買って出た若いソグド人は石槃陀^{せきばんだ}と名乗ったが、その槃陀も同じで、その名前は「(神の) 僕」の意味である。ナナイヴァンデに対応する女性形のナナイダーイ (nny δ 'yh) も知られていて、ダーイは「女奴隸」を意味する。このように、ソグド人の信仰は人名に非常によく現れている。それでは問題のナナ女神はどのような姿をしていたのであろうか。

1-1 カフィルカラの浮き彫り：ナナ女神とサマルカンドの寄進者

2017年9月、帝塚山大学の宇野隆夫客員教授（当時）をリーダーとする日本とウズベク共同発掘隊が、サマルカンドの南10キロほどの所にあるカフィルカラ遺跡を発掘し、見事な木彫の浮き彫りを発見したことは新聞でも報道された。カフィルカラ遺跡はイスラム史料に、イスラム化以前のサマルカンド王の離宮レーウダードとして記録されている城塞都市の遺跡で、712年にサマルカンドがアラブ軍により攻略された時に蒙った火災の跡が確認されている。火災により炭化した状態で発見された浮き彫りは、長方形の板とアーチ型の板の2種類あったが、長方形の方は141cm × 124cmで保存状態が良い。それをもとに描き起こした図が公表されている。（図2）

浮き彫りには中央上部に大きく描かれた獅子の上に座る女神像と、その回りに4段にわたって配列された寄進者像が見られ、45人が確認される。アーチ型の板の中央の最上部にも、女神が二匹の獅子を左右に配した椅子に座っている。（図3）メソポタミア以来、ナナ女神は獅子に乗ることが知られている。アーチに描かれた方は四臂になっていて、上方の二臂は日月を手にしている。多臂であることや日月を持つことはインド文化の影響であり、こちらの方が新しい。この新旧のナナ女神像が併存するレリーフは、寄進者の衣装や風貌などから、6世紀、ソグドがエフタルの支配下にあったときの作例だと考えられる。この時代、エフタルの勢力は北西インドからソグドやタリム盆地を含む広い地域に及び、インド文化の影響がソグドにも伝わった。そのためこの時期から神像の表現にヒンドゥー教の要素が顕著に表れるようになる。例えばベンジケント遺跡の壁画ではソグドの風神ウェーシュパルカル（wyšprkr）は三面六臂で描かれている。（図4-1）この場合、壁画の下方にソグド文字で wyšprkr と記してあった。明らかにインドのシヴァ神と習合している。実はこれはクシャーン朝下のバクトリアのオエーショ（oñbo）神に遡る。oñbo はソグド語の wyšprkr と同源であり、ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』の風神ワーユ（Vāyu）に由来する。

ナナ女神の回りに描かれた人々は寄進者である。髪を短く切りそろえてい

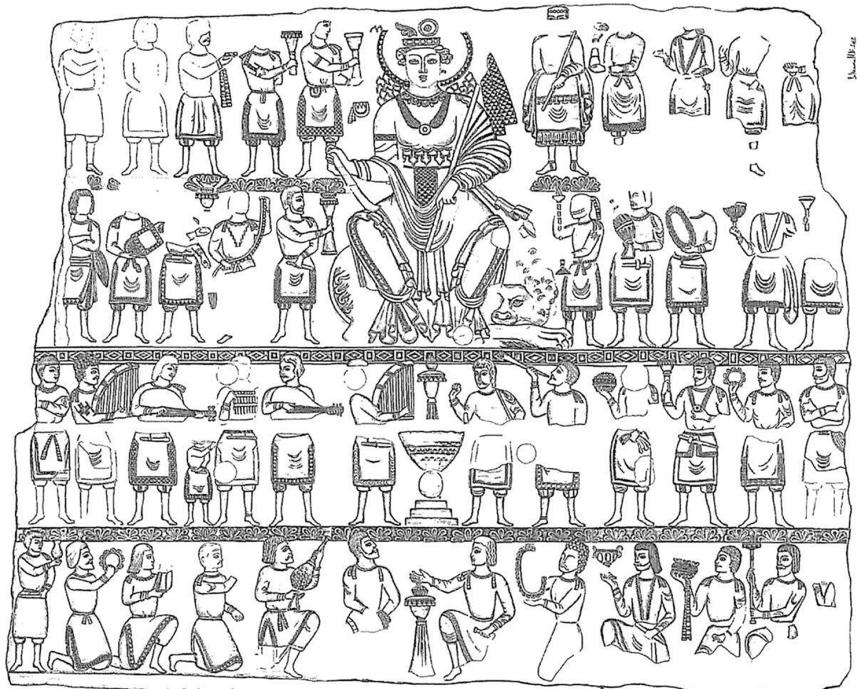


図2 カフィルカラ遺跡出土の長方形の木彫の浮き彫りの描き起こし〔フランツ・グルネ「カフィル・カラ出土の木彫パネル—サマルカンド市民（naf）の集合画—」『東方学』vol. 139, 2020, p. 70より引用〕

る。顎髭は剃っている場合が多く、中国で見つかる明器の胡人俑（ソグド人を象った焼き物の人形）とはイメージが異なる。（図4-2）帽子もかぶっていない。キャラバンで移動する商人は帽子をかぶりひげ面になっていたのであろう。この時代の男子の正装であろうか、両サイドにスリットのある上着で、腰から下はエプロンのように見える。ズボンを押し込んでいるのは胡人俑と同じである。それぞれ寄進物を手にしている。確認できるのはいろいろな形状の器物で、おそらく銀器であろう。楽器を携えた人々は音楽を捧げていると考えられる。そのうちの笙僕は、正倉院にあるものと似ているということで当初から注目されていた。特筆されるのは、アーフリーナガーンと呼ばれている細長いキノコ型の持ち運びできる拌火壇である。



図3 カフィルカラ遺跡出土のアーチ型の木彫の浮き彫りの描き起こし〔フランツ・グルネ「カフィル・カラ出土の木彫バネル—サマルカンド市民(nāf)の集合画—」『東方学』vol. 139, 2020, p. 71より引用〕

フランスの中央アジア考古学・ゾロアスター教学の権威であるF.グルネ教授は、ここに描かれた人物のうちナナ女神の足もと向かって右側、ライオンの顔の直前にいる人物が、幅の狭いマスクをしていることに注目している。マスクは火を穢さないためにゾロアスター教の神官がするもので、現在のゾロアスター教徒はパダームと呼んでいる。グルネ教授はまた、神官のすぐ上、一人だけ他の人物と異なり正面観で描かれているのは、錫杖を手にしているサマルカンド王だと考えている。王が他の一般人と同じサイズで描かれているのは奇妙だが、ここに当時のソグドの社会の特徴が反映されているとしている。

シルクロード交易で繁栄した頃のソグドは、古代のギリシアや、ベニスの商人の舞台となった中世末の北イタリアのような都市国家連合体になっていて、各オアシス都市は互いに独立していた。そして各都市に王はいたが、世襲される絶対的な権力者ではなく、都市に所属する有力者（土地を所有する地主や裕福な商人で、後のイスラム史料ではディフカーンと呼ばれた）たちの合意に



図 4-1 ヴィシュパルカル (Marshak, B. 1990, "Les fouilles de Pendjikent", *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, pp. 286-313, fig. 16. より引用)

よってその地位が保証された。漢文史料では「国人」と呼ばれていた。『旧唐書』には、康国(サマルカンド)王の泥涅師師(じにりゅう)が神龍年間(705-707)に死ぬと、国人はおそらく血縁のない突昏(とつこん)を王に立てたとある。漢文史料の国人はソグド語ではナーフ(n'β)「人民」に当たると考えられ、グルネ教授は、この浮き彫りは当時のサマルカンドのナーフの一種の集合写真のようなものだと言っている。当時のソグドのこのような社会構造は文化にも反映されていて、ササン朝に見られるような国家の威信を示すモニュメンタルな建築や芸術作品はソグドではなく、有力者の邸宅の壁画に代表される、小規模で個人的かつ貴族趣味的な美術作品がソグド文化の

特徴であるとされる。またササン朝のゾロアスター教のような国家宗教とそれを支える教会組織は存在せず、神官の地位は低かった。ササン朝では神官たちが文書行政や司法を牛耳っていたのと対照的である。そのこともあって、おおむね異教には寛容であったようだ。

このように、ソグドの故地の発掘によって出土する遺物や、わずかではあるが存在する文献資料によって、ソグド人の宗教・文化について見てみることはある程度可能である。とりわけサマルカンドの東60キロにあるベンジケント遺跡で見つかる壁画などの造形資料は参考になり、研究文献も多い。

2 ソグド人固有の宗教

イラン系の民族であるソグド人たちの生まれつきの宗教は、現在我々がゾロアスター教と呼ぶイラン民族が古代から受け継いできた宗教である。春分で始まる一年が、各30日からなる12ヶ月と5日からなる短い月で構成される太陽暦を採用し、月の30日はゾロアスター教の神格名で呼ばれている。たとえば第一日はアフラマズダーの日である（『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書』1, vol. 4, 111頁も参照）。アケメネ

ス朝時代の紀元前5世紀に導入されたこの宗教暦は、イラン文化圏で共有され、ソグドも例外ではない。ゾロアスター教として現在我々が見ることができるには、ササン朝時代からの伝統を受け継ぐペルシアのゾロアスター教徒たちが伝承する宗教儀礼と聖典である。しかしササン朝の国教としてのゾロアスター教は、かならずしもソグドのそれとは同じではなかった。

中国ではこのソグド人が信仰するゾロアスター教を祆教と呼んだ。その「祆」は7世紀の前半に新たに作られた専用の漢字であった。そのためソグドのゾロアスター教を、ササン朝のそれと区別して「マズダ教」、「ソグドの宗教」と呼ぶ研究者がいる。ナナ以外にもギリシアの神格デーメーテールに由来するジーマト（δrymt）神、オクサス川の神格ワフシュ（wxwšw）、漢文史料で得悉神として記録されたタフシーチュ（txs'yc）神などもソグドではポピュラーだったが、ササン朝では知られていない神格である。名前が違う場合もあり、正統派ではウォフマナフと呼ばれる、アフラマズダーの陪神はアヴィヤー



図4-2 三彩駱駝・牽駱胡人俑（唐・8世紀）
公益財団法人平山郁夫シルクロード美術館蔵

マン（'þy'mn）と呼ばれていたようだ。アフラマズダーもソグドではタブーのために直接その名前で呼ぶことはなく、アードゥヴァアグ（"ðþγ）「最高神」と呼ばれ、アフラマズダーの名前は月の一日の名前でしか聞かれなかった。またササン朝では新年が本来の春分からずれてしまった関係で暦の改革が行われ、5日からなる短い月は8番目の月の直後に移動したが、ソグドではもとのままで一年の最後に置かれていた。さらにササン朝の正統派では禁じられていた偶像崇拜は、ソグドでは盛んで、壁画には多種多様の神格が描かれている。

ソグドの宗教が、正統派のゾロアスター教とどれほど異なり、またどれほど似ていたのかは、ソグド語で書かれた宗教文献が豊富にあれば、両者を比較することによってある程度理解できるであろう。しかしながら現在まで残されたソグド語文献は、ソグドの歴史や固有の宗教・文化を知るためには、一般の人々が予想するほど役に立たない。それでなくとも多いとは言えないソグド語文献の大半は、一部のソグド人が改宗した仏教、キリスト教、マニ教の文献で、ソグド人固有の宗教や文化とは無関係だった。しかもそのほぼすべてが漢文やシリヤ語、中世ペルシア語などの原典からの翻訳であり、固有の文化はほとんど反映されていない。さらにそれらが出土するのは、ソグド人の故国ではなく、遠く離れた敦煌とトルファンである。景教（いわゆるネストリウス派のキリスト教）、摩尼教、祆教は唐代の三夷教と呼ばれたが、ソグド人の民族宗教である祆教は布教の必要がないため、祆教文献が漢訳されなかったことも見逃せない。

むろんソグド本土からもソグド語文献は見つかるが、貨幣の銘文や陶片に書かれた零細な資料が大半で、実質的な内容を伴わない。例外はムグ文書と呼ばれる80点あまりの世俗文書である。これはベンジケント王デーワシュティーチュ（在位：～722）が、アラブ軍と戦ったとき立てこもったムグ山上の砦の遺跡で発見された。ベンジケントから東に60キロほどの所である。主に在位末期の書簡や帳簿類であって、ソグド人の文化を反映したものではない。そのような次第で、今に残るソグド語文献には、ソグド固有の文化を伝えるものはほとんど見つからないが、ここではわずかに存在するいくつかの関連する文献を紹介し、壁画のような物質文化との関連について解説することにする。

2-1 ソグド語のゾロアスター教文献

最近まで我々が目にしているソグド語の写本には、ゾロアスター教の文書はないと考えられてきた。しかし近年になって、従来マニ教文献と考えられていた敦煌出土の二つのソグド語写本が、ゾロアスター教文献であることが指摘されている。その内の1点は、京都国立博物館が所蔵する守屋コレクションに含まれる漢文仏典（大智度論）の裏に書かれたテキストで、1979年に筆者が発表した。（図5）ゾロアスターが最高神に死後の魂の運命について質問するという内容で、マニ教文献にはゾロアスターが現れることがある一方で、それまでソグド語のゾロアスター教文献は知られていなかったから、仏教でもキリスト教でもないこの文献を、当時筆者はマニ教文献だと考えていた。実は似たような内容の敦煌出土のソグド語文献で、大英図書館が所蔵するテキストをマニ教文献だとする研究が、恩師であるシムズ＝ウイリアムズ教授によって1976年に発表されていた。草書体の書体から判断して、どちらも8～9世紀の写本であろう。ちなみに日本にあるソグド語文献が解読されたのはこの文書が始めたかった。1994年になって、この二つの文献が、ソグド語で書かれたゾロアスター教文献であることが、グルネ教授によって指摘された。その二つのテキスト（どちらも断片）を和訳してみよう。ちなみにソグド文字はこの頃には縦書きされていたようだが、研究者は、もとは右から左に横書きされていた関係で、横書きとして写真を提示することが多い。

守屋文書

義者ゾロアスターは尋ねた：おお、父であり技巧みなる最高神（＝アフラマズダー）よ。どうぞ次のことを私に説明してください：このような定めはあるのでしょうか。つまり、地上で死んだこの魂に、その後このような定めはあるのでしょうか。すなわち、自分の家に来ることができますか、できませんか？死んでから、父親は息子に、息子は父親にまみえるでしょうか、母親は娘に、娘は母親に、姉妹は姉妹に、兄弟は兄弟に、さらに一族は一族に、親族は親族に、友人は友人にまみえるでしょうか、まみえな

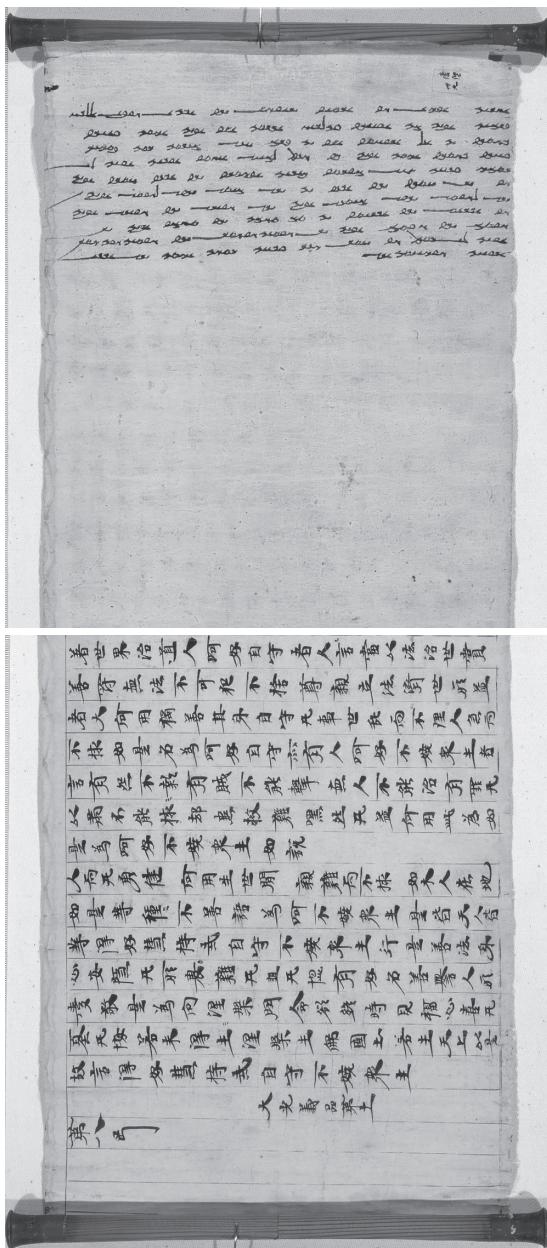


図5 大智度論巻第八（下=表面・上=裏面）
京都国立博物館蔵（守屋コレクション）

いでしょうか？もし息子
がすばらしいなら、彼の
父親の魂に満足はあるの
でしょうか…

グルネ教授は、この文書
にある義者の死後の運命
についての議論が、正統
派のゾロアスター教文献
である『ブンダヒシュ
ン』の34章と並行するこ
とを指摘された。

大英図書館の文書

冒頭の2行に通常のソ
グド語では理解できない
一節がある。（図6）そ
れはローマ字転写すると
次のように読める：[...
.]mwyšt myšt'y wšt'y
wšt'y 'štwxm'y twrt'y
'xwšt'yrtm（ソグド文字
は子音文字で母音を表記
する文字はない）。そし
てそれに続く部分は通常
のソグド語で書かれてい
て、それは次のように翻
訳される：

神々の帝王であり、讃えられ、技巧みなる最高神（＝アフラマズダー）が
香しき天国（＝光り輝く歌の家）において、良き思考の中にあったその時、
その場所に、全き正義持てるゾロアスターが至り、左膝から右に、そして
右膝から左に（跪いて）最高神に礼拝した。それから最高神に申し上げた
「善行の裁き手、法に従い判決する（者）、法を…

ゾロアスターが跪く所作を表現するこの独特のフレーズは、そっくりそのまま
現行の『アヴェスタ』の「ヤシュト書」17章22節などに見える。天国を表すロ
フシュナーガルドマン（rwxšn'yrδmn）はアヴェスタ語のラオフシュヌムガ
ロードウマースム（raoxšnəm garō.dmānəm「（原義）明るい歌の家」）に遡る。
何よりも驚かされたのは、当時シムズ＝ウイリアムズ教授の指導教官であった
ゲルシェヴイッチ教授が、冒頭の意味不明の文字列が、紀元前に話されていた
古代のソグド語を表記しており、それがアヴェスタ語で伝承されている祈祷句
のアシュムウォフー（Ašəm Vohū）に対応することを見たことであった。
例えばアヴェスタ語のアシュム（ašəm）は、さらに古い段階ではルタム
(*rtam) と発音されていたはずであるが、この呪文の末尾の rtm がそれに当
たる。この語が当時のソグド語に残っていれば、ウルトゥ (*ərtu) のような
発音に変化していたはずである。

我が国のイラン学者の伊藤義教
教授は、アヴェスタ語のこの呪
文を「天則は最勝のよきもので
ある。それは思いのままにおわ
します。それは、われらのため
に、その思いのままに（おわし
ます）。願わくは天則が最勝の
良き天則のために（おわします
ように。）」と翻訳しておられる。
「天則（＝世界の秩序）」と訳さ
れているのが ašəm < *rtam で

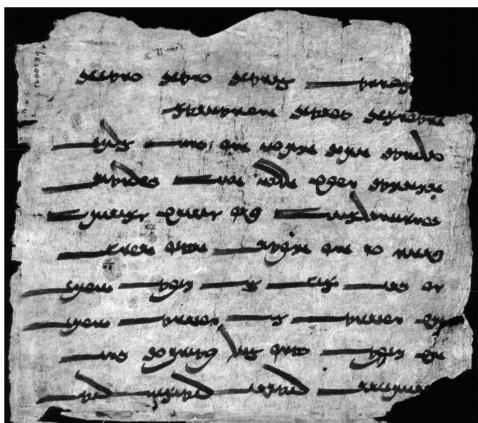


図 6 大英図書館蔵のゾロアスター教文献
(Or.8212/84=Ch.00289)

ある。

このようにわずかながら残されたソグド語のゾロアスター教文献のほうは、むしろササン朝の正統派で伝承されている文献と非常に似ていることが明らかになり、ソグドの宗教をめぐる謎が深まったのである。

3 ペンジケントの壁画資料(1)：ソグド語の『アヴェスタ』？

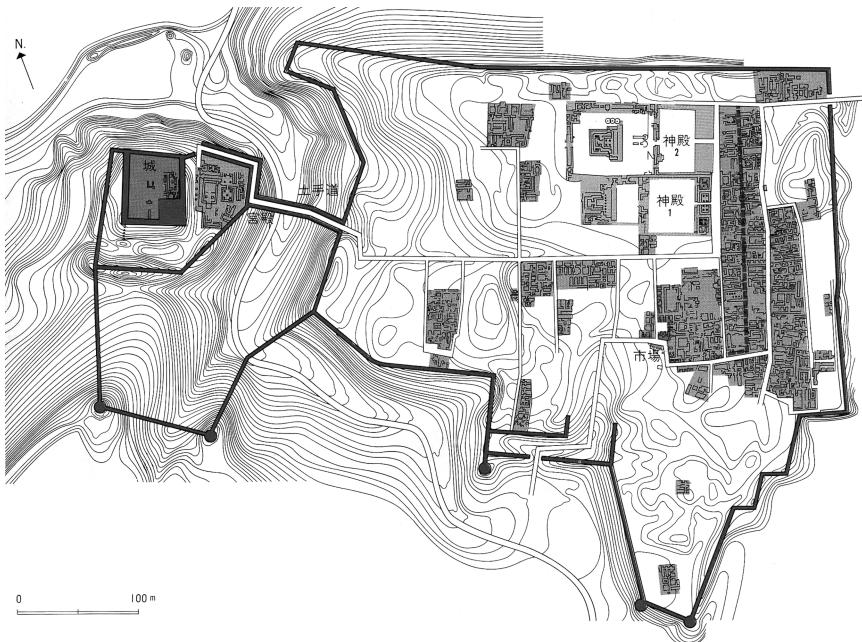


図 7-1 ペンジケント遺跡（クリスティーヌ・フロン編；田辺勝美監訳『世界考古学大図典』同朋舎、1987年235ページより引用）

ペンジケント遺跡は、722年にアラブの攻撃でいったんは焼け落ちたが、740年頃復興しその後30年ほど存続した。しかしその後は完全に放棄されたため、イスラム化以前のソグドの都市の様子がよく残っている。そしてエルミタージュ博物館のスタッフにより、1946年以来、毎年発掘が続けられている。イスラム化以前のソグドの文化を研究する際には、ペンジケント遺跡は特別な存在になっている。ソグドが大きく発展した5世紀に遡る新興の都市ペンジケント

は、19ヘクタールのややこぶりの都城に、巨大な神殿が二つ並んで存在していた。南側の第一神殿には火の祭壇が置かれ、北側の第二神殿はナナ女神の神殿であったと考えられている。ナナ女神はペンジケントの守護神の地位を得ていた。ペンジケント遺跡の発掘で発見された遺物で最も注目されているのは、市内の大型の邸宅の中の主要な部屋、とりわけ応接間に描かれた壁画である。エルミタージュ博物館のB.マルシャーク教授が

生前心血を注いだテーマである。彼は1954年からペンジケント遺跡の発掘チームに加わり、1978年からはリーダーとして発掘を指導しておられたが、2006年の発掘中に急逝した。ペンジケント壁画やソグド銀器など、ソグドの造形文化について現在行われている解釈は、実質的には彼のものだと言っても過言ではないだろう。

ペンジケントで見つかる邸宅の応接間の壁画は、部屋の四方の面を飾っていた。入り口から見て正面の壁には、邸宅の主人が信仰する神格の絵が大きく描かれ、その脇に供養者たる主人夫婦が、小型の拝火壇を前にして小さく描かれている。残りの面は何層かに区分され、祝宴のシーンや叙事詩を絵画化したと考えられる英雄の闘争シーンなどが見られる。(図7-2) 時系列で展開する物語は、山などの自然の障害物でシーンを区分けして図示される。壁の周りには人が腰掛けるためのスーサファと呼ばれる段差があるが、そこに座った人からすぐ見える一番下の層は、小さな長方形の区画に区切られ、イソップ物語のような寓話や説話の一場面が描かれていた。

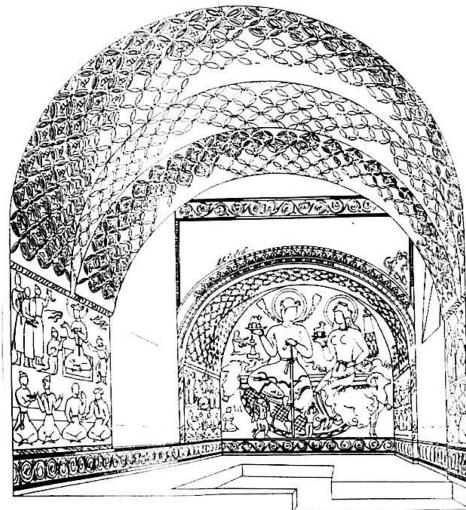


図7-2 B. I. Marshak, V. I. Raspopova, "Wall paintings from a house with granary. Panjikent, 1st quarter of the eighth century A. D.", *Silk Road Art and Archaeology* 1, 1990, pp. 123-176, fig. 12.



図 8 ペンジケント壁画に描かれた大きな書物
(*Studia Iranica* 32, 2003, p.133より引用)

ところで、上で紹介した敦煌出土のテキストのようなゾロアスター教文献が、壁画に描かれていることはあるのだろうか。この点に関してはペンジケント遺跡 XXVI 区、3号室の壁画に大きな洋装の書物が描かれていることが注目される。(図 8) その中から飛び出している神格をグルネ教授は、スラオシャ (Sraoša) 神と考えている。この神はタヌマンスラ (tanu. māθra) 「聖なる言葉を身体とする」という形容辞で呼ばれるからであるとする。この大型の書物こそは、ソグドで伝承されたゾロアスター教の聖典であろう。確かに敦煌で見つかる二つの文献はゾロアスターが登場し、

聖句まで残されているのであるから、ソグド語の『アヴェスタ』の一部だったと考えられる。ちなみにキヤヌーシュ・レザーニヤー教授は、この神格を死後の魂を迎えるに来る女神デーン (アヴェスタ語のダエーナ daēna) ではないかとされる (『奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書』1, 2022, vol. 4, 117 頁参照)。事程左様に壁画の図像の解釈は難しく、しばしば研究者によって異なる神格に比定される。

西安で見つかったソグド商人安伽の墓室の入り口上部の半円形部分には、大きな火の祭壇を前に立つ二人の神官とその脇に小さく描かれた夫婦の彩色浮き彫りがある。(図 9) 漢文の墓誌によれば安伽は579年に死んだ。描かれた夫婦は被葬者であろう。向かって右の小型の拌火壇の前で小さな本のようなものを

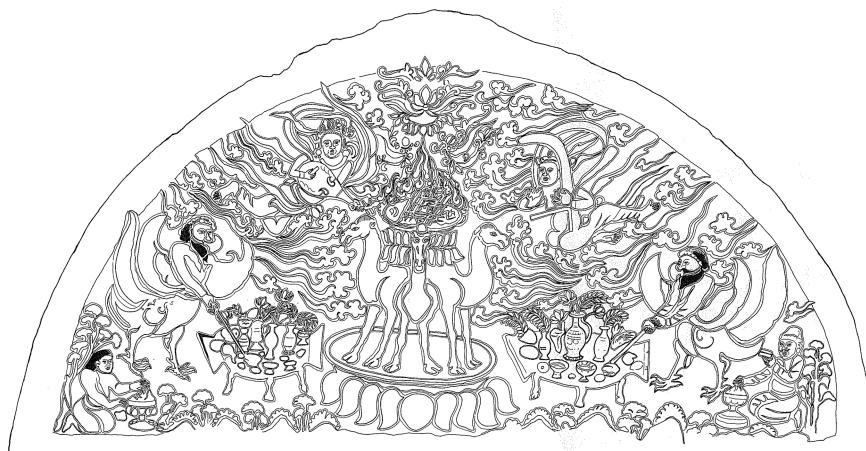


図9 安伽の墓室入口上部のレリーフ
(陝西省考古研究所編『西安北周安伽墓』北京・文物出版社、2003より引用)

持っているのは男性で、左側は女性である。女性は火に何かを焼べている。おそらくお香であろう。現存する『アヴェスター』には、信者が日々の祈りのために使う章句を集めたホルダアヴェスター (khorda avesta 「小さなアベスター」) という小冊子があるが、男性が手にしているのはまさにそれで、そこには敦煌写本に見られるようなソグド語のテキストが書かれていたのであろう。ペルシアのゾロアスター教徒の伝承では、サマルカンドには、ゾロアスターの教えが黄金の板に刻まれて存在したが、アレキサンダーがそれを燃やして海に棄てたということになっていた。ペルシアのゾロアスター教徒も、サマルカンドに聖典が存在したという認識を持っていたのである。

ところで安伽の浮き彫りでは、パダームをつけた神官が二人描かれているが、下半身は鶏で極めて奇妙な姿をしている。これはアベスター語でスラオシャーワルザ (sraošā.varəza 原義「スラオシャ神のために働く者」) と呼ばれている神官であるとされる。時をつくる鶏は、夜明け前に眼気に襲われ火の世話を怠る神官に警告を与える者として、スラオシャ神の助手と見なされた。そのスラオシャ神は、死後の魂があの世に到達するまでの間の守護神でもあった。その意味でこの有翼の神官は死後の世界で祭儀を行っていることになる。